

Big Fat Cat

AND THE

SNOW

OF THE

CENTURY



FROM THE AUTHORS OF THE BOOK

- Tetsuo Takashima -

こんにちは、イラストレーターのたかしまてつをです。ビッグ・ファット・キャットの物語がついに完結です。しみじみ。できることは全部やりたいという思いと厳しいスケジュールとの板挟みで、正直、何度もくじけたり、やけっぱちになったり、ふて寝したりしました。そんなとき、実にタイミングよく読者の方から励ましのメールが届いたりするんです。愛飲していたリゲインよりも、はるかに効きましたよ、これは。応援して支えてくださったみなさま、本当にありがとうございました。

さて、このスペシャルページも最後ということで、僕からは挿絵に関する思い出話(苦労話?)を少々披露させていただこうかと思えます。

BFC BOOKSが始まって、挿絵を現在のようなタッチで描くことに決めたのは、僕にとって大変な挑戦でした。当初、「世界一簡単な英語の本」と同じタッチで「ビッグ・ファット・キャットとマスタードパイ」の挿絵をすべて描き上げたのですが、作者の向山氏の構想する物語と合わせるには雰囲気が軽すぎるということでボツをくらっちゃったのです。のちに物語が進むにつれ、タッチを変更したことはまったく正解だったと実感するのですが、このときは相当へこみました。その後、アートディレクターの竹村氏の協力もあって、試行錯誤の末にようやく現在のタッチにたどり着いたわけですが、これまで描いたことの

ないタッチでちゃんとやっていけるのかどうか、正直とても不安でしかたがなかったです。でも、そのギリギリ感が、向山氏のつむぎ出す物語と真剣に向き合う挑戦者のような姿勢を生み、結果として気持ちのこもった絵が描けたのではないかと今は思います。

絵のタッチと同じくらい大変だったことがもうひとつ。それはアメリカの空気感を出すことです。日本で生まれ育った僕が描く風景は、ともすると和風なテイストになりがちなのです。アメリカ・テキサス州生まれの向山氏とイメージを共有するために、彼の故郷へ取材に行ったりもしました。ちなみに Pie Heaven のあった Outside Mall は、彼が子供の頃によく通ったという古いショッピングモールがモデルなんですよ。小物ひとつ描くにも、自分の思い込みで描かないようにまずアメリカの資料をあたることを心がけていたのですが、それは勢いでガシガシ描きたい僕にとってはとても神経をすり減らす作業でした。なので、「海外のイラストレーターが描いてると思った」という感想をもらったときは、本当に報われた思いで嬉しかったです。「ヨッシャー！」ってガッツポーズでしたね。

あの太った猫や Ed たちと過ごしたこの数年間、こんな思い出話(やっぱり苦労話?)は山ほどあって尽きません。本当に大変で大変で、それでもやっぱり充実した幸せな日々でした。お付き合いいただいた読者の方々、一人一人の手を取ってお礼を言いたい気持ちを込めて、BFC BOOKS 最終巻「ビッグ・ファット・キャットと雪の夜」をお届けします。

たかしまてつを



FROM THE AUTHORS OF THE BOOK

- Takahiko Mukoyama -

本には載らなかった、長いあとがき

2001年の年末に『ビッグ・ファット・キャットの世界一簡単な英語の本』が発売になってから、ちょうど丸三年が過ぎました。2004年、12月——今年、BFC BOOKS 最終巻、シリーズ通巻8冊目となるBig Fat Cat and the Snow of the Centuryが発売になります。少しでも楽しい本を作ろうと夢中になっているうちに、いつの間にか過ぎ去っていた三年間でした。

最終章の発売を迎えるに当たって、本の中では最後まで書くことのできなかったことを、この場をお借りしていくつか書かせていただくことをお許し下さい。

まずはその前に裏話をひとつ。

実はエヴァーヴィルという町は実在しています。

まあ——「エヴァーヴィル」という名前ではないのですが。

『世界一簡単な英語の本』を終えて、『Big Fat Cat and the Mustard Pie』を書き始める時、何冊もの間続く物語として読めるものにするためには、登場人物や舞台設定をいろいろ練り込まなければいけないという課題に突き当たりました。

そこで最初にエドたちの住むエヴァーヴィルという町の地図を描いてみました。『Mustard Pie』の付録に載っているのがその時の地図です。エドと猫が暮らしている町を、ぼく自身もちゃんと頭の中で歩き回れるように、町の路地の一本一本から、名産品や主立った工業、気候や歴史まで考えてみました。

その時、参考にしたのがぼくの生まれたアメリカ合衆国テキサス州のウェーコという町です。実際に行ってみることがあればすぐに分かりますが、配置や大きさや名前などは微妙に違うものの、物語に出てくるエヴァーヴィルのほとんどの場所や風景はウェーコと良く似ています。

イラストレーターのたかさん(たかしまてつをさん)には事前にウェーコへ取材に行ってもらって、指定した建物や風景を全部撮影、またはスケッチしてもらいました。それらを元に作った設定資料やイラストボードを見ながら、徐々にスタッフの中で架空の町、エヴァーヴィルが共通の実体となっていきました。エドの住む町が——生きている世界が——どんなところなのか、ぼくにもその頃からおぼろげながら見えてきたのを憶えています。

エヴァーヴィルの多くの場所は今でもウェーコにあります。

Outside Mall は子供の頃、ぼくがよく通った Franklin Center という三件しか営業している店の入っていないモールがモデルです。(このモール、現在もまだ三件だけで営業しているようです! あっばれ!)

New Mall はぼくが小学校五年生ぐらいの頃にできた Richland Mall という大きなショッピングモールがモデルです。当時のぼくにとってそこは憧れの場所で、その時の視点が物語中でそのままエドの気持ちに反映されているのかもしれませんが、『Goes to Town』の巻末についている New Mall のマップは、当時の記憶を辿りながら、楽しんで作りました。名前や位置などは変わっていますが、思い入れのあったお店は必ずどこかに含めてあります。今ではつぶれてしまったお店も New Mall の中に再現できたので(たとえば当時大人気だった映画館などは、今の Richland Mall にはもうありません)、こんなにうれしいことはありません。

New Mall の前を通る Valley Mills Drive に至っては、名前もそのままにしました。子供の頃通っていた学校がこの通り沿いにあったため、ぼくにとって、とても思い入れのある通りでした。『Goes to Town』の冒頭でたかさんが描いてくれた Valley Mills Drive の夕焼けの風景を初めて見た時には、思わず懐かしさで涙がこぼれたほどでした。あの時のエドと同じように、ぼくも夢の中では、今もよくあの長い道の脇をてくてく歩いています。

Ghost Avenue については、今のウェーコではなく、二十数年前の、ぼくの記憶の中にあるウェーコから引っ張り出してきました。当時のウェーコのダウンタウンはちょうど Ghost Avenue のようにさびれきっていて、もはや営業している店舗が皆無という状態でした。ぼくが生まれる前につぶれてしまったデパートやレストランが、かつての栄光をところどころに残しながら朽ちている姿が、なぜか当時からぼくは大好きでした。

誰もいない町の通りを歩くと、20年前の日付のバーゲンセールのパスターや、誰もいない店内に向けてポーズを続けるマネキンや、永久に来ることのない次のお客さんを待ち続けている理容室の椅子などが、ほこりをかぶった大きなショーウィンドウの奥——薄闇の中に浮かんでいる不思議な町でした。子供心にもその風景を見ていると、人が産まれて、生きて、死んでいくというのがどういうことなのか、漠然と感じられる気がしていました。

そんな寂しくも懐かしい町並みをどうしてももう一度見たくて、ぼくの記憶の彼方にあるダウンタウンをエドたちにもう一度訪れてもらった次第です。すると、そこには相変わらず、残酷なほどゆるやかな しかし、どこか温かで、慈悲深い時間が今も流れ続けていました。お店が潰れても、何年も何年もそれをそのままにしておいてくれる緩やかな世界 Ghost Avenue だけでなく、エヴァーヴィルという町はきっとそんなところですよ。

では、なぜそんな特徴のない、小さな地方の町を舞台に選んだのかというと、それはエヴァーヴィルこそが、ぼくが自信を持ってアメリカと思える唯一の場所だったからです。

アメリカという国のイメージを考えると、とかく自由の女神やマンハッタンのような風景が浮かんでしまいますが、アメリカ人の多くが実際に持っている自分の国のイメージはどちらかというところ、エヴァーヴィルのようなところ。日本人の多くが「日本ってどんなところ？」と聞かれて思い浮かぶのが新宿や銀座ではなく、京都や奈良でもなく、自分が生まれ育った平凡な町並みや、ささやかな駅前商店街であるのと同じように、アメリカ人にとっても故郷とは平凡な風景のところ。

ハリウッドの描くアメリカではなく、本当にどこにでもある一番普通のアメリカを日本の読者に見てほしいという気持ちから、舞台をこういう小さな町に設定しました。アメリカも、英語も、遠い世界のものではなく、それほど変わらないものだと感じてもらえたら、とずっと願っていました。

世界中のどこへ行っても、エヴァーヴィルのような町はあります。

どこの国へ行っても、普通の人々が住んでいる町はみんなエヴァーヴィルのようなところなのではないでしょうか。

ぼくが幼少期を過ごしたアメリカのウェーコも、小学生の時に住んでいた山口県の下関市も、互いにぜんぜん似ていないというのに、不思議とどちらもエヴァーヴィルとは似ています。どちらも普通の人々が普通に生きている、ささやかな地方の町だからなのかもしれません。

戦争のニュースがあたりまえのように新聞にあふれる時代に、そんないつまでも変わることのない穏やかな世界への願いを託して、この三年間、エドとデブネコの物語を書き続けてきました。

世界中にたくさんあるエヴァーヴィルのような町で、いっしょうけんめい生きているたくさんのエドのような人たちがこの作品の主役でした。そういう人たちによって、このシリーズは作られてきました。そして、そういう人たちによって、このシリーズは支えられてきました。この物語がここまでたどり着くことを実現してくれたのは、そんなたくさんのエドたちの励ましと応援でした。

イラストレーターのたかさん(たかしまてつを)は寝る間を惜しんで、何百枚という絵をこの物語のために心を込めて描いてくれました。

ねこそう(吉見知子)とよーじ(竹村洋司)の二人は、本来なら作者の欄に載っていなければいけないほど、あらゆる面でこの作品をぼくとたかさんと共に作ってきてくれました。

本編と三色辞典を少しでも読みやすく、分かりやすくするために、膨大な時間と愛情を賭けてくれたちゃーらん(井上貴子)とあやさん(中村文)はいつだってこの本の屋台骨でした。

この五人がBFCに流れる暖かさを作り出してくれました。この作品は彼らが一人欠け

ても違うものになっていたはずです。彼らにぼくを加えた六人がBFCの本当の作者です。彼ら五人にはただただありがとうというほかありません。そして、長い間、本当におつかれさまでした。

でも、BFCのスタッフは決して彼らだけではありません。

限りなく無茶に近いスケジュールと作業量にも関わらず、ずっと素晴らしい仕事をしてくれた幻冬舎の校正、製作、デザインスタッフのみなさん、そして、一冊一冊大切に本を売ってくれた幻冬舎の営業部のみなさん。この作品の意味と目的を深く理解して応援して下さった幻冬舎代表取締役の見城徹氏。いつも発売日に間に合わせるため、不眠不休でがんばってくださった印刷所のみなさん……みんな、この作品に欠かせない人たちばかりです。一人一人名前をあげることができないのがただただ申し訳ない限りです。

そして、リストはまだまだ続きます。作品の立ち上げに深く関わってくれた永野文香氏、何十回もの面倒なメールのやりとりで細かく校正をしてくれたマイクル・キージグ氏、様々な場面で的確な意見やアドバイスをくれた井上裕氏、武田大作氏、宮山香里氏、佐藤祐子様、巽孝之先生、小谷真理様、巽ゼミのみなさま、ねこそうの実家のみなさま、梅光学院大学のみなさま、こやまクリニックのスタッフのみなさま……リストはまだまだ続いていきます。キリがありません。たくさんのたくさんの人たちの優しさと熱意がこの作品を支えてくれました。

そして、この作品の心であり、今も変わらず毎日多くの学生に英語を教え、同時にぼくに多くのことを教え続けてくれる両親には、この作品の柁をはるかに越えた、終わらない感謝を送りたいと思います。このシリーズが語ってきたことは、彼ら二人が生涯を通して周りに語ってきたことばかりです。

忘れてはいけない大事なスタッフはまだ残っています。

ぼくらのわがままな製作手段を全力で支えてくださった幻冬舎の三人の編集者の方々。大きな視点でこの本の製作を守ってくださった石原正康氏、倒れそうになると、いつもなぜかそこにいて受け止めてくれた日野淳氏、そして、このシリーズの企画を吉祥寺の小さなおでん屋の片隅で一緒に作ってくれた永島賞二氏——特に永島さんは誰よりもこの作品を愛し、「命をかけて」と言ってもちっとも大げさでないほど、この作品のために戦ってくれました。プロとして裏方に徹することを信条とする三人は、きっこうして名前を載せられるのはいやがると思いますので、これを書いている時点ではこのページの存在はまだ秘密にしてあります。

そして、一番欠かせないスタッフは、貴重な意見を毎回毎回送ってくださり、根気よくいつも発売日を待って下さった読者の皆様です。

こういった謝辞のページでは、最後に読者に謝辞を送るのが社交辞令になっています。でも、この本の読者へのお礼の言葉はおよそ社交辞令にはほど遠いものです。

みなさんの応援がこのシリーズを作りました。

これほどたくさんの温かい感想のハガキやメールをいただいたことはありません。この三年間でぼくが一番誇りに思っていることです。

そのうちの一枚に「この本を読んでいるすべての人と、作っているすべての人はみんな同じクラスの生徒のような気がしています」と書いてくれた方がいました。

その通りだと思います。ぼくも、スタッフ全員も、そのクラスでいろんなことを学びました。たぶん、ぼくが一番たくさん、このシリーズから学んだのではないかと思います。このシリーズをここまで読み続けて下さったすべてのみなさま——本当に本当にありがとうございました。

そして、最後の最後になりました。このメッセージを終える前にあと一人……いや、あと一匹にだけ、どうしてもお礼を言わなければなりません。でも、残念ながら、そのお礼はもう永久に届かなくなってしまいました。

デブネコのモデルであり、ぼくの子供の頃から十五年近く実家で飼っていた老猫ふわちゃんは、この作品の途中——季節はずれの台風がやってきた夜に——いい猫がみんないつかいく空の上の楽園へ行ってしまいました。ふわはいつも威厳のある、決して人間に媚びを売らない、誇り高い猫でした。ぼくもいつかふわのようになれば、と思っています。

このシリーズと、そこに込められたすべての思いを、ふわちゃんに捧げます。

2004 年末、小平市自宅

向山貴彦

